



阿 部 安 成 (滋賀大学経済学部)

石 居 人 也 (一橋大学大学院社会学研究科)



アトリエ atelier は、もともとは大工や石工などの仕事場を指し、いまでは、画家やデザイナーなどの仕事部屋や工房をいうように、その語が指ししめす対象がひろがった。わたしたちは、自分たちの調査と研究のフィールドとしている国立療養所大島青松園に暮らす人びとの声と話を記録し、それを編む仕組みと方法を思索する場を工房になぞらえて〈話のアトリエ〉と名づけ、より呼びやすく〈話トリエ〉と唱えることとした。

〈話トリエ〉でわたしたちはとくに、聞き取りの場や機会に注意を払おうと身構えている。おうおうにして聞き取りという調査方法は、とりたてて聞き取りをおこなうという機会をもうけて、べつにいえば、事前に時間と場所を決めてしまう。インタビュー形式の聞き取りである。わたしたちは、それとは違う手法を用いようとしている。わたしたちは、イ

¹ 本稿は、2013年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト「療養所空間における〈生環境〉をめぐる実証研究」(研究代表者阿部)、日本学術振興会2014年度科学研究費基盤研究(C)「20世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」(課題番号26370788、研究代表者石居)、福武財団第9回瀬戸内海文化研究・活動助成「ハンセン病療養所に〈話のアトリエ〉を編む」(研究代表者石居)による、また阿部執筆部分は2013-2014年度滋賀大学サバティカル研修制度を利用した研究成果の一端である。

インタビュー形式の聞き取りをすっぱりと排除するわけではない。あらかじめ用意された、録音をするという機会ではこぼれてしまう声をできるかぎり記録したいという希望と、そこにある途切れとぎれの声を断片として排除するのではなく、そうした声がなにかしら記録されたり活用されたりする機会をもうけたいという野望があって、大島での調査と研究にみあった手法を模索するなかで、ひとまず〈話トリエ〉と名づけた看板を掲げてみた。

できることならば、大島とそこに生きたひとたちをうまく理解するために、いまわたしたちが大島にいるときにわたしたちに伝わって来た、音も声も風も光も匂いも景色も文字もそれらのすべてを記録しておきたいとおもうときがある。それがとてもむつかしい企てであることを自覚しながら、わたしたちが大島で得た、たとえば在園者と過ごすなかで聞いた声、みたすがたやおこない、談話のなかで感じたことといった諸相をうまく結びつけて大島とそこで生きたひとたちを理解する手立てを考えたい——これが〈話トリエ〉の構えである。



本 *Working Paper Series No.208* (2014年3月)の「父母に抱かれた「聖者」のひと—国立療養所大島青松園在住者の顕彰」(石居人也との共著)に書いたとおり、わたしたちは、香川県高松市庵治町(かつては香川県木田郡庵治村)にある大島の療養所に生き、そこでキリスト教信徒団体のキリスト教霊交会(以下、霊交会、とする)をつくったひとりの療養者三宅官之治の顕彰碑をたずねた(2014年2月22日土曜日)。それは彼の郷里に2006年に建てられた碑で、その隣には官之治とその父母の名と三人の歿年月日が刻まれた石碑があった。その石碑は官之治が亡くなった年の翌1944年に、霊交会とかかわりのあった牧師宮内岩太郎の尽力によって、庵治石でつくられた父母子三人の墓碑だった²。

前掲「父母に抱かれた「聖者」のひと」の末尾に記載のとおり、園の行事バスレクを活

² 野島多以司「霊交会五十年記念に寄す」(『霊交会 創立五十周年記念誌』大島青松園霊交会、1964年)。

用した霊交会会員による創設者三宅の墓参が3月以降だんだんと具体化してゆくとともに、顕彰碑建立をめぐるいくつかの相がわかってきた。本稿はそれらのようすとともに、霊交会会員による創設者の墓参という行事を記録するものとなる。本稿は、まず執筆の意図や方針をおおまかにさだめてそれぞれに稿を書き始め、脱稿直前に執筆者ふたりでそれぞれの稿について協議をしてまとめた³。

本稿は、顕彰碑建立や墓参という出来事の記録にとどまらず、記録者であるわたしたちがおこなう判断や主張も混ざる記録ともなる。どういうことがらについて、どのようにそれらを書かざるを得なくなったのかを自覚しながら、記録と解釈を書くこととしよう⁴。

†

前掲稿脱稿ののち、3月23日(日)から26日(水)まで国立療養所大島青松園(以下、大島青松園、とする)で調査をした。この訪島のまえに霊交会代表から、彼の前任者がかつて『癩院創世』を送ったところ、その送り先から強い抗議の電話があったと聞いていたので、それを確かめるために、24日(月)に前代表のおつれあいにお会いした。前代表は2012年にお亡くなりになった。園内のセンターにおられるおつれあいにお話をうかがった。『癩院創世』を送ったのは前代表ではないこと、それがだれかでどこに送ったのかはわからないこと、抗議電話をだれがかけて来たのかはわからない、話しぶりから男性のようだった、送られて来た『癩院創世』の記載内容をめぐってだいぶ「激昂」しているようすだったが、前代表が説明をするうちにだんだんと相手も「和らいで」いったようだった、相手はハンセン病のこともキリスト教のことも知らないようだった、とうかがった。

この『癩院創世』とは、やはり霊交会創設者のひとりである長田穂波が三宅の伝記を記

³ 2014年6月8日。このとき、保苺実『ラディカル・オーラル・ヒストリー—オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』(御茶の水書房、2004年)もふたりで検討した。同書についてはいずれべつに批評を発表する予定。

⁴ なおできるかぎり厳密な記録とするため、話者が話した言葉そのものに「」をつけた。また個人名は調査者、故人のみ記した。6月15日に霊交会代表と協議して、墓参をめぐる園側との交渉の詳細をここには記さないことと決めた。

した原稿が出版されないままになっていたところ、在園者の土谷勉がそれをもとにしなが
ら長田や宣教師 S.M.エリクソンについて加筆して 1 冊にまとめた、大島におけるキリスト
教伝道史というべき内容の書物である⁵。土谷勉は霊交会会員ではなくキリスト教信徒でも
なかった。土谷は大島で、三宅、長田、そしてもう 1 つのちの世代となる石本俊市といっ
た霊交会会員と親交があり、長田の書いた原稿を石本から借用して、それを自著の原本と
した。1949 年に発行された『癩院創世』を、霊交会創立 80 周年の記念として 1994 年に「再
版」したときの霊交会代表が先代だった。おつれあいは抗議電話がいつのことだったのか
覚えていっしやらなかったが、おそらくこの再版ののちだったのではないだろうか。

会の創立記念にと再版した『癩院創世』がおもわぬ波紋を広げたということだ。電話の
主がなにに憤っていたのか、いまとなっては知るよしもない。ただわたしは、『癩院創世』
への抗議電話のことを聞いてすぐに、三宅にかかわるひとからの反撥ではないかと感じた。
それは、同書のなかで氏名と出生地が明記してある療養者は、三宅官之治ただひとりだっ
たから。

†

3 月 25 日（火）は島外の教会から来客があり、霊交会代表はその応対にあたっていた。
客が帰ったあとの霊交荘応接間のテーブルに、代表が客にみせたであろう写真が数葉あっ
た。それらは、これまでわたしたちのみたことがない写真だった（のちに JPEG 形式でい
ただいた写真データの番号を [] 内に記す）。いずれも顕彰碑が写った写真で、三宅官之
治父母子石碑（仮称）と三宅官之治顕彰碑の 2 碑の写真 [20121023_1]、2 つの碑のまえで
の集合写真で、左から、祭服の男性、女性が 2 名、男性 3 名が写る [20121023_2]、顕彰
碑の碑文を文字起こししたその文面を写した 1 葉 [20121023_3]、顕彰碑の^{おもて}表面の写真

⁵ 『癩院創世』については、阿部安成「物語を解すー国立療養所大島青松園で結ばれたキ
リスト教霊交会の歴史記述」（『国立ハンセン病資料館研究紀要』第 4 号、2013 年 3 月）を
参照。

[20121023_4]。こうした写真があることに、とても驚いた。



[20121023_1] に写る三宅官之治父母子石碑には、花と額に入った肖像写真が供えてある。肖像写真は、霊交会教会堂図書室に掲げられた三宅の写真とおなじ肖像にみえる。同一物なのか複製なのかまではわからない（2014年6月15日にあらためて確認したところ墓碑まえの肖像写真と霊交会教会堂図書室のそれとでは額が違った）。[20121023_2] に写る人物に、さきのブログに掲載された写真に写るひとと同一人が複数いる。祭服の男性と年配男性3名のうちのふたりがそう。また左から三人めのいくらか年配の女性は、前掲稿に記した光木で猫と暮らす三宅姓のおばあさんに似ているようにみえた。

写真に気づいたのがもう19:00をまわっていたためその夜は霊交会代表に連絡をとらず、翌朝出航のときに写真についてうかがうつもりだった。だが翌日の朝の出航時はいつになく慌ただしく、代表からお話を聞けなかった。島を離れた日の翌3月27日（木）に霊交会代表に電話でたずねると、いつ、どういう経緯でこれらの写真が霊交会に届いたのかはわからない、いろいろな写真のなかにあった、とのことだった。

JPEGのデータでいただいたこれらの写真のプロパティ（属性）をみると、番号順に2006

ever after

年 11 月 19 日 12 : 33、同日 12 : 35、2014 年 3 月 25 日 7 : 49、2006 年 11 月 19 日 13 : 22 の日時が記録されていた。おそらく、顕彰碑碑文を文字起こししてプリントした文書をスキャンした写真が、わたしがそれをみた当日に印刷された 1 葉で、ほかの 3 葉は 2006 年というときからすると、また、写された石碑に花と肖像写真が供えられているようすから、顕彰碑建立時に撮影され、そののちそう日を経ないうちに霊交会に宛てて送られた写真の複製なのだろう。顕彰碑の表面には、「二〇〇六年（平成十八年）十一月吉日建立」と刻まれている。

わたしが最初に大島にわたったときが 2004 年だった。2 年つづけて翌 2005 年にも大島で史料撮影をおこなったが、2006 年はいちども大島へは出かけなかった。2006 年 12 月に発行された好善社の広報紙『ある群像』第 90 号に掲載された「療養所教会の今（シリーズ 1）大島青松園（単立）キリスト教大島霊交会」には、代表がかわったことが記載されている。交替がいつだったのか同記事はそれを詳細に伝えていない。三宅の郷里にその顕彰碑が建立された 2006 年 11 月は、霊交会代表の交替の時期だったかもしれない。

霊交会にだれが顕彰碑建立の写真を送ったのか、三宅の肖像写真を介して顕彰碑建立まえに霊交会と顕彰碑建立発起人たちとのあいだにつながりがあったのか、これらがただちに疑問としてうかんだ。顕彰碑を知るきっかけとなったブログにかかわりのありそうな方への連絡はいくらか億劫になっていた、それを試みる決心がついた。

†

2014 年 3 月 29 日（土）付で、ブログに記されている教会の牧師宛てに書簡を郵送した。そこには、顕彰碑と墓前礼拝について記されたブログをみたこと、顕彰碑建立についての情報を得たいことを書いた。

それへの返信が電子メールで 4 月 1 日（火）にわたしのもとに届いた。そこには、わたしからの手紙が「思いがけず」届いた便りであること、ブログのご当人であること、顕彰碑建立発起人のおひとりの住所が記されてあった。すぐにお礼の電子メールを送信した。

ever after

ついで、4月12日(土)付でその発起人のおひとりに宛てて書簡を郵送。その返信として、同月16日(水)付の「適用当日限り」の切手が貼られた封書が届いた。「三宅官之治の顕彰碑については」、ブログ執筆の牧師の「外には、誰にも話して居」ないこと、「もう何年も前に青松園の事を書いた本を見てびっくりしました。三宅官之治、佐伯北村光木の出身との記事を見てびっくり致しました」とのこと。

この発起人は、三宅の姓を持つ人物の長女の二男だった。顕彰碑に発起人としてその名が刻まれていた三宅姓のふたりは、ひとりが彼の「従弟」、もうひとりが「分家」で、「本家筋はと絶えてないので、我々が墓守りをしている関係で顕彰碑の建設を計画致しました。〔中略。分家——引用者による。以下同〕の方が石屋をしていた関係であの顕彰碑を作りました。完成の際〔中略。ブログの牧師に〕顕彰碑完成の司式をして頂きました」と記されてあった。

†

顕彰碑建立関係者と連絡をとる一方で、3月29日(土)から4月1日(火)まで大島で調査をする予定で離滋し、途中で岡山県立記録資料館に寄った。目的は岡山の地元紙の閲覧。あとでみるとおり、2013年以降、大島青松園でその年に亡くなったひとりの在園者をめぐって、彼女の郷里での「名誉回復」が報道されていた。その事例との対比を試みるために、1944年の岡山県赤磐郡における墓碑建立が報道されているか否かを地元紙にみることにした⁶。

1944年の岡山地域では、『合同新聞』が発刊されていた。これは『山陽新報』と『中国新報』の合併紙『山陽中国合同新聞』が改題された日刊紙で、のちに『山陽新聞』となる地元紙である。これをまずは岡山県立記録資料館で、ついで国立国会図書館で1944年の1年分を閲覧した。

⁶ 岡山県での地元紙の閲覧について、松岡弘之の教示を得た。

1944年はやはり戦時期であり、県内各地の報道も、また「郷土」と題された欄でも、たとえば、「赤磐／佐伯北、仁掘その他郡北部各警防団では一日、暁天動員を行ひ竹槍訓練のち滞貸薪の運搬に敢闘、佐伯北警防団は薪六千束を福田駅に搬出」（『合同新聞』1944年12月3日）との記事があるものの、赤磐郡佐伯北村での療養者墓碑建立の報道はなかった（ただし2館それぞれの所蔵分には複数の欠号があった）。

だが岡山県立記録資料館では1つの発見もあった。『岡山県人名鑑』（編集兼発行人西崎清志、発行所岡山日日新聞社、1974年）に、顕彰碑に発起人としてその名が刻まれていた三宅姓のひとりが掲載されていたのだった。同人は赤磐郡吉井町出身で1930年の生まれ、1950年に石材工業所を設立したその所長だったとわかった。のちにこのことが聞き取りの内容（後記）と合致すると知る。

†

4月中旬に霊交会代表に宛てて、赤磐の地図2点を送った。これは、赤磐市山陽郷土資料館学芸員が地図のコピーを貼りあわせてつくってくださった細長い地図とA3判1枚の地図で、同館から光木までの道筋と、光木近辺とがわかるものだった。

この地図が届いたころをうかがい、また建碑発起人のおひとりと連絡がついたことを伝えるため、4月23日（水）に霊交会代表に電話をかけたところ、おつれあいがでて、きょう墓参の下見にいったとのことだった。霊交会のひとりが創設者の墓碑をみる最初のようにすを記録したいという覗き見根性がわたしにあったため、その場に立ちあえなかったことが少し残念だった。

†

わたしに返信をくださった建碑発起人のおひとは、複数の面談候補日を示してくださっていた。4月29日（火祝）に大阪市内のお住まいの駅ちかくにあるホテルのロビーラウンジで、わたしと石居人也とふたりでお話をうかがった。

ever after

今年のお誕生日で 90 歳ちかくにおなりになるその方は、1920 年代中葉のお生まれとなる。さきにみた『岡山県人名鑑』に略歴が掲載された三宅姓のひとつよりも 10 歳くらいの年長者。三宅姓ではないその方は、三宅の家に生まれたお母さんが嫁いだため姓がかわったとのこと。もうひとり三宅姓ではない発起人も養子にいったため姓がかわったという。発起人 4 名はすべて三宅の縁戚だった。霊交会にあった墓前での集合写真をおみせしたところ、左から、岡山県内の教会の牧師、その妻、発起人三宅姓のひとりの妻、三宅姓ではない発起人、ご当人、もうひとりの三宅姓発起人、と教えられた。不在の三宅姓の発起人は、当時病床にあったため、代理でその妻が来たのだという。牧師とはそう頻りに会う間柄ではないとのことだった。

建碑のきっかけは、『癩院創世』を読んだことだったというが、なぜそれを手にしたのかは覚えていないとのことだった。『癩院創世』を読んでとにかく「驚いた」、「立派なひと」がいたものだとおもった、それが建碑のきっかけとなり、「従兄弟」たちと話しあい、そのひとりが石屋だったので、地元の石を使って碑を建立した、また、官之治の肖像写真については、だれの所蔵か、どういう経緯で持って来られたのかも忘れたという。霊交会に写真を送ったことも知らなかったとのこと。

子どもころに官之治のことを聞いていなかったかとのわたしの問いに、「箝口令」が敷かれていたのだろうといいあらわして、口のチャックを閉じるしぐさをした。

わたしと石居による聞き取りは、およそ 1 時間だった。

†

翌 4 月 30 日（水）に霊交会代表に電話。前日の面談の概要を伝え、墓参のことをうかがう。下見には、霊交会から代表をふくめて 2 名、園からも 2 名が現地へいった。現時点で悪いということではないが、墓参予定者の体調が当日どうなるかが「懸念」としてある、墓所のちかくまでバスが入れないのであれば、身障者用の車を 2 台チャーターして現地へ向かう、朝の高松便に乗る、とのことで、もしわたしたちが乗車すると混みあうのであれ

ever after

ばレンタカーを利用すると伝えた。5月4日に大島へゆくこととした。

ゴールデンウィークさなかの4日(日休)に島へわたり、聖日礼拝に出席した。このところ会員5名出席がつねのようすだったが、おひとりのすがたがみえない。礼拝の報告で代表は、墓参のときに墓前礼拝をしたい、ついでには聖日礼拝にいらっしゃっている方に墓前での礼拝をお願いしたい、墓参に備えて日々鍛錬しているひともいる、支援者として阿部、石居、宮本結佳が同行する、とのべた(正確には3者に「先生」がついた)。礼拝のあとで、墓前礼拝での祈禱などを指名された方が、それを了承した。

そのあと代表と話をした。彼は、墓参を「霊交会の原点に立つ」「霊交会の原点に帰る」と表現した。下見の報告をうけた園管理職からは、「山奥」の「とんでもないところ」への墓参となる、園のバスである「やしま」号(2台あるバスの大きい方)が現地には入れないため小さな乗用車を使うこととなる、ついでにはそれに乗車できる2名による墓参としてはどうかとの打診があったという。それに対して代表は、貴重な機会なので、園の身障者用自動車(8人乗り)と民間タクシーの身障者用(同前規模)で希望者全員が墓参できるようにしたいと応じたとのこと。

このとき、下見で撮影したというたくさんの写真と、墓前礼拝で供えるために額に入れられた三宅の肖像写真をみせられた。

話は墓所のしたにある民家に住む方にもおよんだ。わたしたちが2月にいったときには留守だったお宅だ。代表がいうには、「ひとのよい」、「田舎」の夫婦で、「さきへさきへ」といろいろ手配し、わたしたちがいうところの「猫のおばあさん」の家まで案内され、彼女にかつての顕彰碑建立時の写真をみせると、あれこれと話し始め「よろこんでいた」ようすだったとのこと。おそらくただ1軒だけ光木に残る三宅姓のこのお宅に猫と暮らすおばあさんから、わたしたちは2月の訪問時にうまく話を引きだせなかった。霊交会代表たちとおばあさんとの邂逅では、過去の写真がうまく機能してなごやかに話がつづいたのだろう。ただ案内にたったというその夫婦の姓と、わたしの覚えにある、墓所下の民家の表札に記された姓とが違うような気がした。そのときはそれを確かめはしなかった。

ever after

聖日礼拝の報告にあった、墓参に備えて鍛錬する会員は目がみえない。昼間歩いているので、なにをしているのかと代表がたずねたところ、墓参にむけて「足腰を鍛えている」といったという。

†

帰りの船を待つあいだ、浜のベンチでも霊交会代表と話した。霊交会の墓参希望者は 5 名、ただしうちひとり「ドクターストップ」の恐れがあるので 4 名になるかもしれない、それに介護員、看護師、運転手、「記録」係で出かけることとなる、と代表はのべた。不参の恐れがあるおひとりが、この日の礼拝にいなかった方だった。

大島青松園ではこのあいだ在園者がひとり亡くなって 79 名となったと、このときうかがった。逐次刊行物『青松』の毎号に掲載される「大島青松園入所者数・年齢別数等概況」の 2014 年 3 月 1 日現在の「入所者数」は「計 80 名」だった（『青松』通巻第 675 号、2014 年 4 月）。代表の発言は、「平均年齢 81.8 歳」という現況で 80 名という数であれば、園側の制限にも一理だけはあるということのようにも、また、そういうときだからこそいま、墓参にいつておかなければならないという主張のようにも聞こえた。

†

訪島翌日の 5 月 5 日（月祝）に霊交会代表と園管理職との協議が予定されていたので、5 月 7 日（水）の昼すぎに霊交会代表へ電話をかけてようすをうかがった。その詳細はここでは省略する。目のみえない 98 歳になる会員は、その日も鍛錬のため教会へあがっていったと聞いた。

園が実施するバスレクは、いくつもの団体が利用していると聞いていた。ときに泊まりがけとなることもあるとのことだったので、この墓前礼拝がすんなりと決まらないようすが、わたしには不思議だった。

5 月 9 日（金）午前中に霊交会代表から電話があり、ようやく決まった、との第一声があっ

ever after

series 話トリ工 01*W-atelier01*

た。朝の高松便に乗り、園にある 2 台のバスのうち、いくらか小さい「たまも」号で赤磐の大きな駐車場のある食事のできるところまで行って、そこでタクシーに乗り換えて墓所までゆく。医師、介護員、看護師、記録係、案内係など総員 11 名になったとのこと。たんなる墓参ではなく墓前礼拝をおこなう、プログラムも作成した、ついでに来賓代表として挨拶をしてほしいとのことだった。

わたしたちがバスに乗ったりタクシーに分乗したりするには座席数や台数がたりないようであれば、わたしたちは高松でレンタカーを借りてゆくと伝えたところ、その日のうちにもういちど霊交会代表から電話があつて、わたしたち 3 名もバスとタクシーに同乗できると留守番電話に録音されてあつた。

2 月下旬のわたしたちの調査から 11 週間ちかくを経て、予定された日程の 1 週間ほどまえに、まさに、ようやく、墓参が決まった。

5 月 11 日（日）の朝、聖日礼拝が始まるまえに霊交会代表に電話をした。墓参にかかわる園側との交渉決着の理由を聞いた。それをここには記さない。墓参を希望していたひとりはいま病棟にいるため無理だろうとのこと。霊交会会員 4 名の墓参となった。

このころから当日の空模様が気になりしょっちゅう天気予報をみていた。赤磐と高松の天気予報では、11 日（日）に始まる週には雨マークがついたり消えたりし、前日の木曜日は曇と雨、当日の金曜日は晴との予報となった。前日に雨が降れば、足元がどうなるかが気がかりだった。

† †

4 月 29 日（火）の昼下がり、待ちあわせ時間の大阪は、土砂降りの雨だった。面識のない方との、公共の場所での待ちあわせに悪天候がかさなつて、いつも以上に緊張感があつたことをよく覚えている。多少の行き違いののち、出逢うことができたその方は、事前の手紙から想像していたよりも、お元気な印象だった。

雨を避けてホテルのロビーラウンジへと移動し、その方（以下、氏、とする）には長方

ever after

形のテーブルの長辺に座っていただき、その両側の短辺に、阿部とわたしが座った。はじめに録音の許可を得たうえで、おもに阿部が質問をおこない、そこでの氏とのやりとりについて、わたしが傍らでメモをとりつつ、必要に応じて会話に加わるかたちで聞きとりをおこなった。聞きとりをはじめると、ゆっくりとした、そしてささやくような話しぶりに、わたしたちはほどなく顔を、耳を寄せるべく前傾姿勢となり、ついに阿部は氏の隣へと席を移すこととなった。一瞬、緊張が解けて、周囲の様子が気になったものの、天候のせいなのか、時間帯のせいなのか、周囲の席に他の客の姿はなかった。

聞きとりは、碑の前で撮られた集合写真 [20121023_2] に写っている人物たちについての問いかけからはじまった。これについて氏は、ひとりひとり、とりわけ建碑者でもある、ご本人を含めた 4 名の縁戚について、丁寧に説明をしてくださった。その際、二親等ほど遡って、それぞれの関係について説明がなされたのだが、そこには 2 月にわたしたちが墓地を訪れた際にみた墓碑に刻まれていた「馴染み」の名前も登場した。縁戚相互、とりわけ氏との間柄についての説明もあり、墓碑から得られる情報だけでは縦割りでわからなかった、関係性も明らかになった。

つぎに、話題は建碑に至る経緯に転じた。氏によれば、2003 年ころだったかに、三宅官之治について書かれた本を読んで、母の旧姓と同じ「三宅」姓で、かつ母と同郷であることに驚き、関心を抱いたという。その本とは、『癩院創世』（1949 年初版、1994 年再版——こちらである可能性が高い）のことだといい、手にとったきっかけが何だったかについては、記憶が定かではないとのことで、偶然性を強調されていた。そうだとすれば、これは何というめぐりあわせだろうか。

あわせて、三宅官之治については、それまでは聞いたこともなかった、とくり返しておられたのが印象に残っている。そのことについて氏は、さきに阿部が記した「箝口令」のくだりとともに、「昔」ハンセン病は「嫌われ」ており、「田舎だから」病者がでたことが発覚すると「のけ者にされる」のを恐れて、知らされていなかったのではないかと、と自らが置かれていた状況を示してみせた。

ever after

顕彰碑文はおもに、碑に氏名が刻まれている発起人 4 名のうち、氏ともうひとり、三宅家から「養子」にでた人物が考えたという。この人物は、学校長を務めた経歴をもち、「文章が書ける人」だったとのことで、ふたりが、郷里で暮らしていた三宅姓のふたりを「説得」して、建碑に至ったとのことだった。どうやら発起人 4 名も、はじめからおもいを同じくしていたわけではないようだ。このことは、郷里で、同じ姓を名乗って生きてきた者と、郷里を離れて生きてきた者との懸隔であるようにもみえる。つまり、三宅官之治の発病をいま、ここ、にもつなげる問題として此岸におき続けている者と、いまここにいる自分と、しかとはみきわめられない結びつきがあることを自覚しつつも、それをひとまずは彼岸におくことができる者とのあいだにある温度差ともいえるだろうか。

だがもちろん、氏も三宅の縁戚として三宅官之治の系譜をひく者であることに違いはなく、そうした緊張感とも決して無縁ではない。官之治と氏の母や祖父母との関係にまつわる問いかけには、はっきりとはわからないという答えが返されるとともに、官之治は「三代も、四代も、前」の人であり、直系は絶えているとの説明がなされた。それでもなお、建碑しようとの意思を支えた原動力は、『癩院創世』をとおして知った官之治の「人となり」を後世に伝えたいという強いおもいであり、そのおもいの一端は、碑文にもあらわれている。

また、建碑の際に撮ったとおもわれる写真 [20121023_1] にみえる官之治の「遺影」の入手経緯、および同じ斜面に墓所をもち、現在も、墓所に最も近い場所で暮らしている家（異姓）との関係については、わからないとの答えが返ってきた。

建碑の際、岡山県内の教会の牧師が立ちあうことになった経緯についても尋ねてみた。それについては、氏が属している教団の紹介を受けて、郷里に近い教会の牧師に手紙で連絡をとり、立ちあいを依頼したとのことで、それ以前からの関係があったり、三宅家が代々クリスチャンであったわけではないとのことだった。それにしても、療養所における官之治の活動を支えたのも、郷里への官之治の父母子碑建立に介在したのも、顕彰碑を郷里に建てる原動力となったのも、キリスト教だったことになる。

氏は、1920年代に母の嫁ぎ先の地で生まれ育っており、母の郷里へは、幼いころ頻繁に出かけたわけではなかったが、三宅姓のふたりとは交流があったという。加えて、祖母（母の母）が、母（祖母の娘）を訪ねて来ていた記憶も有しているが、それでも、官之治については聞いたことがなかったわけである。また、郷里の三宅家は現在、一軒を残すのみとなっているとのことで、2月の踏査が裏づけられた。

三宅官之治の顕彰建碑をめぐる氏の話から、わたしは、それぞれの立場で建碑に携わった4名の建碑者にとっての、三宅官之治との関わりにおもいを馳せた。氏にとって官之治は、青天の霹靂のごとく、突然眼前にあらわれたことになる。何も知らされず、聞かされずに育ち、ある日手にとった一冊の本によって、その人と出逢ったのである。『癩院創世』は、官之治の後半生を知る者によってしたためられた本であり、そこに記された〈半欠けの三宅官之治〉に触れた氏は、「キリストの証人」であるかのような官之治のルーツと後半生を知り、そのあいだにぼっかりとあいた深淵をいくらかでも埋めるように、建碑に向けて動きだした。それは、官之治を失ったまま過ぎてきたその時間と向きあい、欠落したピースを埋めるかのような作業とも映る。氏が、声をかけたもうひとりの三宅家出身の方も、あらかじめ官之治を知っていたかはともかくとして、ピースを埋める作業に積極的に携わったことになる。

一方、郷里のふたりは、「説得」される者として話に登場した。郷里で生まれ育ったであろうふたりが、1944年の三宅官之治父母子石碑の建碑のことを、さらには三宅官之治その人のことを、どの程度知り、記憶していたかは、定かでない。ただ、氏が顕彰建碑の意向をふたりに伝えた際には、知らなかった様子だったという。一方、官之治が熊本から大島へ療養先を移した理由のひとつは、母親の津宇が見舞いに通うことができるよう、すこしでも郷里に近い療養所に入るためだったとされている。実際に津宇は大島の官之治を見舞ったのか、見舞ったとして大島での官之治の様子を郷里に伝えたのだろうか。いずれにせよ、官之治が青年期までの半生を生きた地に生まれたふたりは、どこかに官之治の影を感じながら育ち、生きてきたのではないか。その間に官之治は亡くなり、父母子碑が建てら

ever after

れている。発病した官之治が郷里を離れ、熊本を經由して大島へ渡り、大島で亡くなって郷里に「還って」も、郷里に残されたのは、官之治の前半生にまつわる影だっただろう。それは、氏が『癩院創世』をとおして触れたのとはまた異なる〈半欠けの三宅官之治〉であり、郷里のふたりは、それを感じながら、「三宅」の姓を背負って生きてきた。かれらにとって顕彰建碑は、そのような影の顕現を意味したのであり、大きな決断をとまなうものであったといえるのではないだろうか。

† †



5月16日(金)、前夜の雨が上がり、風が強いものの天気はよく、5月にしては蒸し暑い一日だった。「墓前礼拝」の様子は、阿部執筆部分による。ひとつひとつが心に残る一日だったが、とりわけわたしには、ふたつの場面が印象に残っている。

ひとつは、「墓前礼拝」のなかば過ぎ、プログラムでいうところの、二度目の「祈禱」の場面。牧師が、参加者全員に対して、父母子石碑の基壇部分に「やさしく」触れるよう促し、全員が石碑を囲むように手を伸ばして眼を閉じた。こういった礼拝の場面では珍しくないのかも知れないが、わたし

には、これが深く印象に残った。参加した霊交会員4名のうち、おふたりは眼がみえない。眼がみえない方の世界の感じ方は、わたしなどには想像も及ばないのだが、もてる感覚を駆使して、わたしよりもはるかに豊かな世界を感じておられる様子に、折にふれ接している。そうした方々にとって、触れるという行為がもつ意味が大きいことはいままでもない。

ever after

だが、それがとりわけ印象に残ったのは、参加したすべての人がそれに「触れた」ためである。

いまひとつは、事前に鍛練をかさね、無事に「登山」を終えた最高齢の会員が、帰りの車内で、「あんな（山の——石居註）うえに、あんな大きな石を」「エンヤコラサで」「コロを敷いて」「綱をつけてひっぱりあげたんじゃろか」と、建碑に携わった「昔の人」の労苦と、そこにあらわれたおもいの深さに、おもいを馳せていた場面である。この方は、眼がみえない。したがって、「あんな大きな石」と了解したのは、さきの「祈禱」のときであり、「あんなうえ」と了解したのは、自らの足で登り降りをしてみて、「この坂には恐れ入った」との感を抱いたからこそである。そして、どのようにして「あんな大きな石」を庵治から運び、どのようにして「あんなうえ」まで運びあげたのかに想像をめぐらせ、具体的に披露してくださった。この方の眼前には、たしかにひとつの像が影を結んでいることが、伝わってきた。

歴史を考えるうえで、あらゆる感覚の活用は大切だと、頭では理解していたつもりだった。それがゆえ、「現場」に足を運ぶということ、これまでも極力してきたつもりである。だが、わたしは、このときまですくなくとも、触れて何かを感じるという意識をもって石碑に触れたことはなかった。わたしでさえ、眼を閉じて触れることによって、感じ取ることができるものが、たしかにあった。まして、霊交会の方々にとっては、会の創設信徒として、現会員の誰しもが直接の面識はなくとも、大切に抱いてきた「三宅大兄」の碑である。「大兄」の郷里に自らの足で立ち、その碑にじかに触れた意味ははかり知れない。碑に触れることをとおして、直接的には出逢ったことのない「大兄」を感じ、「大兄」と対話をする——そのような姿と、わたしには映った。

霊交会の会員は、郷里にあって三宅官之治の前半生にまつわる影、すなわち〈半欠けの三宅官之治〉を背負い続けた三宅姓のふたりとは対照的に、療養所、とりわけ大島で暮らすようになって以降の、「清泉」とも名乗った「大兄」三宅官之治の影を抱き続けてきた。もちろん、それが官之治の人生のすべてではないことを承知のうえで、である。そのよう

ever after

series 話トリ工 01*W-atelier01*

な意味でいえば、霊交会員もまた、三宅姓のふたりとは異なる〈半欠けの三宅官之治〉を抱き続けてきたことになる。霊交会のこのたびの「墓前礼拝」は、そうした、承知のうえで触れることの（でき）なかった三宅官之治の前半生に、それもまた部分的にはあれ、触れる機会だったわけである。いくつものピースを欠いていることを知りつつも大切に抱き続けてきた三宅官之治の、失われたピースのいくらかを埋めるための行事として、「墓前礼拝」はあったようにおもう。

それを可能にしたのは、三宅官之治とともに草創期の霊交会を支え、すくなくとも自らが知りえた範囲で官之治を書き残そうとした長田穂波、三宅の没後、かれを郷里に（も）埋葬しようと企図した宮内岩太郎とそれを支えた者たち、長田・宮内の意思（遺志）を酌んで『癩院創世』として活字化した土谷勉、それを会の創設八十周年記念として再版した霊交会員、それをひとり（氏）が手にとったことをきっかけに、顕彰碑の建立という実践に結びつけた三宅の縁戚たち、建碑に「偶然」立ちあうことになり、ブログで発信した牧師、その記事に接して調査をおこなったわたしたち（阿部・石居）、調査に協力してくださった赤磐市山陽郷土資料館の学芸員、調査の結果を得て、強い意思をもって「墓前礼拝」の実現に力を尽くした霊交会員、当日の「墓前礼拝」を支えた大島青松園のスタッフなど、〈わたしたち〉の行為のいずれかが欠けていれば、すくなくとも「あの日」の「墓前礼拝」は実現しなかったし、霊交会の会員が「あの日」、三宅官之治のピースをいくらか埋めることにはならなかつただろう。

もつとも、「あの日」、ピースをいくらか埋めたのは霊交会員だけではなかつたようにおもう。すくなくとも、三宅の縁戚や霊交会員とは、部分的にはかさなる〈半欠けの三宅官之治〉に触れてきたわたしは、2月と5月の「墓参」をとおして、やはり幾許かのピースを埋めることとなった。「あの日」「あの場所」へ出かけたすべての者が、あらかじめ〈半欠けの三宅官之治〉を抱いていたわけではない。だが、「墓前礼拝」の参加者は、「あの日」「あの場所」で、何かに触れることとはなつたはずである。その触れた何かに、三宅官之治の影をみだし、それを自覚的に受けとめようとすることによって、それは〈三宅官之治〉

ever after

のピースとなるのではないだろうか。

「あの日」「あの場所」での「墓前礼拝」を実現せしめた一連の行為のリレーに携わった者の多くは、〈半欠けの三宅官之治〉を抱き、心のどこかで、その欠落したピースをすこしでも、ひとつでも埋めようとの意思をもっていたようにおもう。ただ、リレーのなかには、〈半欠けの三宅官之治〉を手放そうにも、決して手放しえなかった者、あるいは、〈三宅官之治〉を抱くわけではなく、ただそのピースに触れた者も、含まれていた。つまり、リレーに携わった者たちは、求めてそれを抱く、偶然にもそれに触れて抱く、手放そうにも手放しえない、ピースに触れつつも抱きはしないなど、さまざまなスタンスで〈三宅官之治〉と「向きあう」こととなった。そうしたさまざまなスタンスの人びとの、「残す」「伝える」「抱く」「触れる」といった行為の積みかさねが、〈三宅官之治〉を再構成してゆく所為となったのであり、なつてゆくことを、リレーの一端に携わって、あらためて感じた次第である。

†

5月15日(木)、傘をさすほどではない小雨のなかを自宅から最寄駅へ向かう。京都で新幹線に乗ると、大阪で車窓からみる町に傘が開き、岡山でもいくらかの小雨、高松では雨はすっかりあがっていた。高松駅から港までのあいだにあるホテルのフラワーショップで、花籠をつくってもらう。ピンク色の花で花籠をとくと、お祝いですかと聞かれ、ちょっと困ったが、この墓参は祝賀とってよい行事だとおもい、そのようなものです、とこたえた。大島の栈橋には、いつものとおり、霊交会代表のすがたが



ever after

あった。

まえの週に出版社とうちあわせたとおり、リプリント版『藻汐草』の一部がその出立の日



日に自宅に届いたので、その 1 冊を墓前に供えるため持参した。霊交会代表もできあがった史料集をみてよろこんでいた。

墓参当日の 5 月 16 日（金）、朝の高松便は 8：30 の大島出航。なんだかわたしも気が急いたのか、8：00 に棧橋に向かった。棧橋袂の吹き流しが真横に流れるほどの風が吹いていた。空は快晴。心地よい天気だ。ベンチに座ろうとふりかえると、

正門の向こうに霊交会代表の歩くすがたがみえた。98 歳の方もおつれあいといっしょにはや棧橋へ。代表もジャケットを手に持ち、もうひとりはおつれあいからネクタイをわたされていた。正装の用意だった。通園車でもう一組の夫妻が到着。墓参の霊交会会員 4 名がそろった。

朝の高松便は庵治から着いた船が高松へ向かう。庵治から通勤の乗船者がたくさん大島に降りる。霊交会の 4 名はいくにももの職員に声をかけられていた。墓参を知ってのことだろう。朝の挨拶がなんども交わされる。高松便には現自治会長と前自治会長も乗船。きょうは高松で高松市が開催する「大島の在り方を考える会」に出席とのこと。今年 2014 年 1 月に開かれたそれを傍聴したわたしには、開催の連絡がなかった。傍聴人の数はそう多くはなかった。わずか数名であっても一人ひとりに連絡はしないということなのだろう。高松港で石居ほかと合流。「たまも」号には、霊交会会員 4 名、牧師 1 名、介護員 2 名、看護師 1 名、職員 3 名、医師 1 名、そしてわたしたち 3 名の総員 15 名が乗り込んだ。

高松港をでるときに、岡山の牧師に電話で連絡をし、赤磐の近辺でもういちど電話をかけることとした。車内で園職員による参加者紹介があったところで、わたしから、被撮者に無断のまま WEB などで公開しないことわったうえで、音声録音、写真撮影、ビデオ撮影の許可をみなにもとめ、了解を得た。

ever after

大島青松園の在園者といっしょに島外へ出かけることは、わたしには初めてだった。瀬戸大橋を自動車でもわたることも初めて。これまでになんどもわたった JR の線路よりも一段高い場所からの眺めは、マリンライナーの車窓からみえる馴染んだ景色よりも開けてみえた。後ろの席の霊交会代表に、大島から瀬戸大橋がみえるのに、瀬戸大橋からはどうにも大島がわからないと話した。彼は瀬戸大橋から大島の方向にみえる島の名をいくつもあげた。あいだにある三角にみえる島は、瀬戸大橋からも大島からもはっきりとわかる。瀬戸大橋からは、男木島や女木島と大島が並んでみえてしまい、個々の島々に区別がつかないのかもしれない。

†

途中で 3 台のタクシーに分乗して予定のとおりおよそ 2 時間で光木に着いた。岡山の牧師夫妻とも支障なく会えた。来駕の謝辞をのべる。総員 17 名が墓所へ向かう。途中でちょっとした紛議があり、さきに霊交会代表から聞いた、現地で案内して下さった老夫婦が墓所のすぐしたの家のひとつではないとわかった。その老夫婦は、墓参のまえに、墓所のあたりの草を刈ったり筍を抜いたりして下さっていた。竹藪にはいくつもの大きな穴が空き、大きく育った筍も放りだされてあった。交流の一端のあらわれである。

三宅官之治父母子石碑に、赤い十字架のついた白い大きな布をかけ、そこに肖像写真と、霊交会教会堂から持ってきた天金装幀の厚い聖書をおいて用意が整った。正午ころに墓前礼拝が始まった。

ときおり吹く強い薫風は不快な邪魔とはならず、竹林の葉を鳴らし、木洩れ日をちらつかせる舞台道具となっていた。プログラムを記そう。

黙禱／讚美歌 539 番／聖書拝読ヨブ記第一章・～二十一節／祈禱／讚美歌九〇番／主の祈り／式辞／祈禱／献花／頌栄 541 番／祝禱／後奏 542 番／挨拶／霊交会代表／来賓代表

祈禱のとき、牧師にうながされて三宅父母子 3 名の名が刻まれた碑がある墓に手をおい

ever after

た。初めてこの墓にふれた。2月の調査時には墓に触るなどおもいもしなかった。ふだんの身内の墓参にさいしても、掃除以外に墓にふれることはない。不思議な体験だった。キリ



スト教の墓前礼拝では慣例なのかと、確か翌日に石居が霊交会代表に聞いたとおもう。初めての墓前礼拝なので知らないとのことだった。

墓前礼拝はおよそ40分となった。98歳の方が終始背筋を伸ばして立っておられ（帰路くりかえし、よかった、ありがたい、とおっしゃっていた）、礼拝を進行する代表

の声にしっかりと張りがあったことが印象に残った。帰りはほとんどのひとが、九十九折りの坂をくださった。職員ふたりが、墓所を整えくださった老夫婦と猫と暮らすおばあさんのところへ挨拶にいった。墓前礼拝がつつがなく終わった。

分乗したタクシーを降りたところで、みなで昼食となった。食事を終えて出立するときになって、バス車内に三宅の肖像写真がないことに気づく。ひとりぽつねんと食堂に残されていた。危うく大失態となるところだった。

帰りの船を待つ高松港で、霊交会代表は、「始まりの終わり」と墓前礼拝をとらえてみせた。代表のこの言葉を聞くのは2回めだったとおもう。不思議な言葉だ。創設者の墓参することも、墓前礼拝をすることも初めてだったという。それもこれかぎり、もうこういう機会はないだろう、お終いだ、ということか。霊交会の会員には初めての体験となったが、それもこれで終わり、という区切りをつけたのだ。まだ機会はあるでしょう、といたい気もしたが、わたしはそれをしなかった。なぜかはよくわからない。

代表に前任者からの交替の時期をたずねたところ、もはや何年のこととは覚えておられず、ただ交替期は10月とのことだった。おそらく三宅官之治顕彰碑建立のときは、交替したてのところだったのだろう。

ever after

大島の栈橋では通園車と園管理職が待機していた。霊交会の 4 名はみなそれに乗ってそれぞれの寮へ戻った。

あらためて、よい 1 日だったとおもった。霊交荘へ入り、すぐに祝杯をあげた。ふたりだけの祝宴のさなかにみたテレビ・ニュースで「大島の在り方を考える会」の報道があったがよく覚えていないと、翌朝に石居が語った。わたしはニュースをみたことすら覚えていなかった。

†

余談をいくつか。翌 17 日（土）朝に、西海岸を徒歩で南下した。前日が満月だったので潮が干るだろうと期待して、干潮となると見計らった 6:00 ころから歩き始めた。西海岸の栈橋から南は、いくつかの弧状の浜に分かれている。その 2 つめのところで、もろく崩れる岩肌を登るか、海につかって岩を回り込むかとなり、そこで踏査を断念した。そのさきがおそらく、かつて果樹園があった浜のはずだった。いまこのあたりを歩くひとは、ほとんどいない。



かんたんな朝食を済ませて、三宅の肖像写真や聖書などを教会堂へ戻し、そこから「相愛の道」



へ向かった。これは療養者自身によって 1935 年につくられた、大島北方の山を周回する細い路である。これまでもしばしば、反時計回りで、大島神社やつつじ亭のあたりまでは歩いたことがある。教会堂の裏からはわずかな距離だった。この日は初めて、時計回りで歩き始めることとした。

教会堂の裏手の道を進み、「相愛の道」の碑の手前で左に曲がった。しばらくは、かつて

ever after

農機具などを入れて使用していたであろう小屋があり、山の斜面には石積みが見られ、コンクリート製の小さな貯水槽もあった。なにかが飛び込む音に驚く。おそらく蛙だろう。途中で左に折れる小さい路があり、そこを進むと「風の舞」のうえにでた。もとの路に戻ると、そのさきは草木が繁り、足元もみえないところがあった。さきへ進むことを躊躇したが、先延ばしにするとこれからの季節はいつそう草木も虫も増えるだろうから、いまゆくことを決した。大袈裟かもしれないが、それほどの繁茂だった。在園者のひとは、「チベットのほうでおこなわれている体を倒すの」（五体投地）のように身軀を投げだして、草木が倒れたところでさきに進むといていた。ジャングルのように喩えたくなるほどの路をゆくと、日陰は湿気でシダの類が多く、陽向には草も枝もはげしく繁茂していた。

途中の開けたところで、おそらく「牛の背」の方であろうあたりが見えた。海は波が逆立ち、潮流がはげしくぶつかりあっているようすをおもわせた。さらにゆくと分岐となり、そこには盲導鈴のかわりのスピーカーがあり（ただし音声は止まっていた）、左にゆけば「馬の背」へ、目のみえないひと用の銀色の柵がある右へ進めば大島神社へいたる、これまでもなんどが来たことのある場所へでた。スピーカーと柵は、いつの時点かまでは、ここまで目がみえないひとにも来ていたことを伝えている。こうした朽ちつつある機器の在所も、だんだんと島の史跡になってゆく。

「馬の背」へ向かうも、こんどはほんとうに断念。草はところによっては2m ちかくまで伸び、足元はまったくみえない。戻って銀柵のある方へ歩き、すぐにつつじ亭にでた。初めての踏破だった。療養者たちがこの路の散歩や散策を憩いとしていた時代があったのだ。

そのあとで在園者に「相愛の道」を一周したと話すと、途中で花の咲く苔があると教えられた。小さな赤い花をつけるという。まえへと歩くのが精いっぱい、花を見遣る余裕はわたしたちにはなかった（この写真が大島会館に展示してあると聞いていたので、6月15日（日）にみた。ほんの数ミリくらいの不思議な花だった）。その在園者は、「牛の背」には縦2m×横2m くらいの入り口がある洞窟があり、そのなかに大きな発泡スチロールの浮きがあると語った。彼は若いころに海岸を回り込んでそこまで歩いたという。この話を

ever after

うかがうのは2回めだった。

†

土曜の11:00ころから、墓前礼拝を据え置きビデオ・カメラで撮った映像を見始めたところ、ちょうど霊交会代表も霊交荘に来た。鮮明な映像に驚き、これからは自分もビデオ・カメラを使おうといていた。

風が強かったため、プログラムなどを記した紙が飛ばされそうな墓前礼拝だった。それを押さえるために傍らにいたわたしたちが手をだしていた映像をみながら、霊交会代表は、「棒切れ2本のような手だ、不自由な手だ」、といった。自分自身の手が不自由であるため、葉書1枚ですらタイプしたり印刷したりするのに時間がかかるという嘆息を聞いたことがある。そのときとはいくらか違う感じながらも、みずからの不自由さが語られることは稀だったようにおもう。それも、自分が写る写真をみたことはあっても、自分が動く映像をみることはあまりなかったのではないか。そのための感慨だったようにおもった。

家に戻ったところで映像のコピーを送ると伝えたが、このときはそれも待ちきれないようで、ノート・パソコンを持ってくるといって寮に戻った。わたしが撮影したビデオ映像と石居が撮った写真をその場でコピーしてわたした。いつも自分ではPCでみるとのこと、彼のノート・パソコンの内蔵ハードディスクにデータをコピーしたが、翌日の日曜日と翌週の火曜日に教会関係の客が来るから墓前礼拝のようすをみせたいとのことだったので、19日(月)にはビデオ映像をコピーしたSDカードとDVDディスクを大島に送った。たまたま霊交荘にあるテレビとわたしのビデオ・カメラがおなじメーカーの製品だったので、映像を保存したSDカードをテレビに挿入するだけで墓前礼拝の記録をみることができた。

†

5月21日(水)19:30ころに霊交会代表から電話があった。おととい19日(月)に送ったSDカードとDVDディスクへのお礼。ただすでにコピーしていた映像データを、そう

ever after

したあつかいに詳しい職員の手助けを得て、25枚ほどのコピー・ディスクをつくったという。岡山の教会の牧師などいくにんかに送ったとのこと。石居撮影の写真も150枚ほどあり、それらも『青松』編集部にわたしたので、うまく編集するだろうとの期待も示された。

依然として、すごい山のなかだった、との感想が墓参にくわわらなかった職員からも聞こえてきたという。それなりの噂を引きだした出来事となったわけだ。代表は一方で、下見にいったときと道が違ったのか、あれほどの急勾配ではなかった気がする、という。これは墓参当日も話題になったことで、わたしと石居もおなじ感じを得ていた。2月に来たときには、墓所のすぐしたの坂もそうきつくは感じなかった。ただ、墓所へは2つの小道しかない（はずな）ので、初めてのときははやる気持ちが十分な観察をとどめてしまったのだろう。

このきつい坂だったか、民家の玄関先をとおらなければならないかどうかが、6月15日（日）にも霊交会代表とわたしとのあいだで話題になった。墓所へは九十九折りの坂道と民家の玄関先をとおる小道と2とおりにしかないとおもっていた。それがこのときには、九十九折りの坂のとちゅうで、右に迂回してべつな墓所のところをとおって左にまがって三宅姓の墓所へゆく道もあったように思い出した。下見のときはそこをとおったのかもしれない。

墓参した霊交会の4名はみな元気とのこと。創立100周年のよい行事になったと、代表はのべた。

†

さて、ここでさきにふれた2013年に亡くなった大島青松園在園者の、故郷でのその後のようすをみよう。その在園者は塔和子である。

『朝日新聞』2014年5月19日朝刊大阪本社版の「天声人語」でも、彼女がとりあげられ、塔和子という名が「実の名前ではない」こと、その理由が「家族が差別されないよう本名を隠したという」こと、「死後、島の納骨堂に塔和子の名で納められた遺骨が、ふるさ

ever after

と愛媛の父母の墓に分骨されたのは、この 3 月のこと、「墓石に刻まれた本名「井土ヤツ子」の文字に、弟さんたちは「姉さん、やっと帰ってきたね」と語りかけた」ことを伝えた。

彼女が亡くなったのは「去年の夏」だった。それから 10 か月ちかくが経とうとするいま、なぜ塔和子なのかと訝しくおもうむきもあるかもしれないが、記事には 5 月 11 日に亡くなった弐雄二についても記されているので、天声人語子は療養所で「名前を変えた」療養者たちへの思慕と追悼をあらわしたかったのだろう。

記事は「塔さんだけでなく、かつては多くの患者が療養所で名前を変えた。ハンセン病ほど偏見にさらされてきた病気はない」と、その病をめぐる歴史が惨く酷かったと評した。だが、それを病んだ彼ら彼女たちの多くが死んでなお故郷に戻れなかった無残にはふれない。塔和子のように本名が刻まれた故郷の墓に眠る療養者は少ない。

ハンセン病報道に熱心とみえる『朝日新聞』の記事をおってみよう（以下、朝日新聞 DIGITAL による）。2014 年 5 月 1 日付の「(葦) ふたつの名前 高木智子」（高木は「編集委員」）は、「両親の墓にいてと託されていた弟たちは、彼女の思いを受け止めた」と「分骨」の経緯を示した。さらに紙面の日付をさかのぼると、同年 3 月 16 日付高木智子の署名記事「隔離 70 年、塔さん故郷に眠る 元ハンセン病患者の詩人」で、翌 17 日に「ふるさとの愛媛・宇和の海をのぞむ両親の墓に分骨される」と伝え、それは彼女の「尊厳を取り戻したい」という親族の意思のあらわれとみせ、「療養所で亡くなった人のほとんどは所内の納骨堂に偽名・園名で納められてきた。らい予防法が廃止された 1996 年以降、身内が分骨するケースが増えてきている」と時代の変化をたどっていた。

同年 1 月 17 日付「(記者有論) 故塔和子さん 故郷が取り組む名誉回復 高木智子」（このとき高木は「大阪社会部」）が、「私に何かあったときには田之浜にある父さん、母さんのお墓と一緒に入りたい」と「語っていた生前の意をくみ」、「遺骨は今春、生まれ育った愛媛県西予（せいよ）市の小さな港町に分骨される」と報じていた。この記事もさきの記事も、西予市の広報誌での「塔さんの特集」に言及して、それを「名誉回復の一步」と評し

ever after

ていた。

†

療養所で死んだものの故郷でのそうした「取り組み」が、故人の分骨を可能としたとの理解である。受け入れる用意がある故郷に帰れた、という事のしただい。記事にいう「身内が分骨するケースが増えてきている」とは、いいかえると、まだまだ身内が分骨しなければあいが多い、となる。受け入れる用意のない故郷には、いまだ、死してなお帰れない、のである。末期のようす、歿後のなりゆきは、療養所に生きたひとごと異なるだろう。療養所に生きたひとの数ほど、異なった歿後のようすが想像できるのである。それを『朝日新聞』報道は、塔和子をもって代表例とし、それをいわば成功譚として描いている。2007年には彼女の故郷に文学碑が建立された。全国区で著名だという詩人にふさわしい顕彰である。

それにくらべて、赤磐にある 2 つの三宅碑はなんとひっそり閑としていることか。賑やかであればよいということではない。また、この対照は、塔と三宅の違いに起因するのではない。それは 1 つに、「癩予防法」「らい予防法」の有無という時代の違いであり、もう 1 つには、療養者を顕彰するものたちの方にこそある。顕彰の違いなのだ。

†

墓参から 2 週間が経とうとする 5 月 28 日（水）に毎日新聞社の記者に電話をする。その前日に勤務先の学部事務室に電話があり、連絡がほしいとの伝言が残されていた。電話するとそのまま取材となる。三宅墓参のことだった。長い時間かけていろいろ話したと感じた電話取材だった。

記事は、『毎日新聞』朝刊の 2014 年 6 月 5 日地方版／高松と、同月 6 日地方版／岡山に

ever after

掲載された⁷。記事の署名は馬淵晶子、記事見出しは、後者で、「三宅官之治：古里・赤磐に墓碑 ハンセン病療養所患者総代で霊交会設立 入所者ら念願の礼拝「驚きと喜び感慨深い」／岡山」となっていた。霊交会代表の談話として、「墓碑について「癩院創世」にも記述があったが、信じていなかったという」とある。「癩予防法」が現行法としてあり、しかも戦時下において、療養所外に墓碑が建てられたとは信じ難かったということだろう。

6月15日（日）の聖日礼拝のときに、まだ紙面をみていないであろうひとに、霊交会代表から記事のコピーが示された（6月5日朝刊香川版 22面）。そこには、墓前礼拝の写真と三宅の肖像写真の2葉が載っていた。霊交会には原紙3部が送られたとのことだった。

†

5月31日（土）に大島へゆく。このときは聞き取りがおもな目的だった。島にわたって栈橋に降りると、霊交会代表のすがたがなくいつもと違ったようすがあった。職員のひとりから、霊交流会のおひとりがお亡くなりになり代表を始めみなさん協和会館に集まっているとうかがった。協和会館へ急いだ。三宅の墓参へゆけなかったおひとりが亡くなった。

わたしが大島の協和会館へ入るのは、このときが初めてだった。島での葬儀に参列することも、これまでになかった。

「前夜式」は14:30開始。高松便にあわせたのだろう。大島ゆきの船はにぎやかで葬儀にむかう一行がいるとはおもえなかったのだが、ふだんみない顔ぶれの乗客が花束を持っていたりいくらか黒めの服を着ていたりしたことに合点がいった。

すでに協和会館にはたくさんのひとが集まっていた。マイクのある司会席にいた霊交会代表に挨拶をしてお悔やみをのべる。急なことで連絡できなかったとのこと。ジーンズにミッキーマウスがプリントされたTシャツを着ていたわたしは、会場のいちばんうしろにパイプ椅子をおいて座った。

⁷ 石居人也の教示によるWEB版を閲覧。なお2つの版の違いはいくつかの文字表記を漢字とするかかなとするかによる文字数のみ。

午前3時すぎにお亡くなりになったこと、もうすぐくる6月6日のお誕生日で92歳になること、1949年に大島へ来て、1951年に受洗したことを式辞で牧師がのべた。日曜日の聖日礼拝とほぼ同様に式は進み、いくどか讃美歌を斉唱して、線香のにおいがしない葬儀は30分ほどで終わった。まにあわなかったのか慣例なのか遺影もなかった。

式が終わり、霊交会会員、園福祉課職員、牧師、島外の教会信徒たちでお茶の時間となった。翌日曜までの滞在予定を変更してきょう帰ること、霊交会創立100年を記念した連続講演会を開きたいことなどを伝え、霊交会代表からは冷蔵庫にお餅を用意してあることを聞く。そうこうするうちに、霊交へいきましょう、と代表に誘われてわたしたちふたりだけが協和会館をあとにした。



三宅の墓前礼拝にいくといちばんさいしょにいったのが故人だったこと、島にはもう家族はいない、おつれあいが数年まえに亡くなった、彼女が亡くなりエリクソン宣教師から洗礼をうけた信徒がいなくなった、と聞いた。故人が希望していた三宅の墓参ができなかったことが残念だと代表がいうので、信仰心のなくせにわたしは、われわれのだれよりもさきに故人が三宅さんに会っていると慰めだかなんだかわからないことをいうと、代表は笑いながら、「そういう霊的なとらえ方もできるかもしれない」、とおっしゃった。代表がくりかえしのべていた「始まりの終わり」という墓前礼拝についての形容は、故人が発した言葉だったとのこと。

かつては島で在園者が亡くなるとすぐに、島内にいる家族はもちろんのこと、友人、知人、おなじ寮のひとたちに連絡があったのだが、最近はそれがなくなったという。なぜでしょうね、とわたしがいうと代表は、寝たきりのひとが増えたからか、とおっしゃった。

あらためて連続講演会の話をする。わたしたちから霊交会に希望することは、教会堂の使用と案内送付先として教会関係者の教示の2点だけであることを伝え、了承される。交流のある高校にも連絡をしてくださるとのこと。

ever after

このときは猪の話もでた。貯水池ちかくにおかれた檻に一頭かかった、親猪でお腹に 6 頭の子どもがいたという。

また、代表が 2 つの写真撮影ポイントをつくり、そこに梯子をかけたともうかがった。大島には彼だけが歩く道がいくつもある。わたしたちはまだ、いうならばそれらの道のお相伴にあずかったことがない。いっしょに歩きたいとずっとおもいながら、いまだ実現していない。

帰るまぎわに冷蔵庫を開け、用意されてあったお餅をいただく。葛餅 2 パック、蓬餅 1 パック、もう 1 つお餅 1 パック、オレンジ 3 個、大量のおみやげとなった。

この日は濃い黄砂の空だった。新幹線の車窓からみる大阪のあたりは、すさまじいと形容したくなるほどに濃い色の空で、瀬戸大橋をわたるときにはいつもみえる三角の島がかなりかすんでみえた。霧以外でこれほどに視界が悪い瀬戸内海は初めてだった。前日はもっと濃く、高松港では停船勧告がでたと聞いた。帰るころにはだいぶ薄くなっていた。

†

わたしは、故人とはいちども話をしたことがなかった。わたしの聖日礼拝への出席は、いつころからなのかきちんと記録していなかったが、せいぜい去年以降のことだとおもう。それまで日曜日の午前中に礼拝がおこなわれているとなりの図書室で作業をしていますが、礼拝にでることはなかった。信仰がないものがある場所ではないとおもっていたから。でるきっかけは、人数が少なくなった礼拝はさびしい感じがしたので、無信仰のものでもいれば枯れ木も山のにぎわいといたていどのおもいつきで、真剣な宗旨替えではない。

故人は霊交会創立 50 年を記念して刊行された前掲『霊交会 創立五十周年記念誌』に「霊交会の現況」と「霊交会創立以来の主なる事項」、そして「あとがき」の稿を寄せていた。創立 100 年をむかえる今年、もう 50 年もまえとなる記念事業についてうかがいたいとおもっていたが、その機会は今もう得られなくなってしまった。機会が永久に失われてからそれを惜しむことが多くなったようにおもう。

ever after



霊交会のふたりに見送られて島を離れる。
今年も官有船につばめが巣をつくっていた。
船が大島を離れているあいだ、親鳥も幼鳥も
どうしているのだろう。

†

墓前礼拝のあと 2 週間あまりのあいだに話された 2 つのことがらを思い出した。1 つは三宅の肖像写真こと。前掲稿「父母に抱かれた「聖人」のひと」に記したとおり、霊交会教会堂図書室には、エリクソン夫妻と三宅の肖像写真が壁にかかっている。初めて図書室に入ったときにそれらの写真に気づいたものの、被写体がだれなのかは、そののちにだんだんと知ることとなる。天井ちかくにあるそれらは、高くてなかなか手が届かないことと、聖像のようで手をだしにくことを理由に、これまでずっと手にとりしなかった。

エリクソン夫妻の写真を壁からおろしてみたのは去年 2013 年のいつかだったとおもう。『癡院創世』には夫 S.M.エリクソンの写真は、彼の歿後に送られてきたと記されてある。そこにはおそらく米国のもとおもわれる写真店の名があった。妻 L.J.エリクソンと三宅の写真は、いつ、どのようにして霊交会のもとに届いたのかがわからない。いずれも大判の写真である。エリクソン夫妻の写真は、プロの写真家が撮ったとおもえる構図や画質とみえる。一方、三宅のそれは、撮影場所は教会堂内、おそらく礼拝堂の扉まえ。構図は素人写真のようだが、ピントがぴたりと細部まであった写真の撮影者はプロのようにもうかがえる。60 歳台なかばで亡くなった三宅のいつころの撮影なのかがはっきりしとしない。ただ、晩年といってよい風貌が写されたとみえる。

この三宅の肖像写真が原版だとずっとおもってきたのだが、どうやらそうではないかもしれないとわかった。手のひらに載る小さな判の写真があるようなのだ。そうだとすれば、その方が原版なのか、そこにはなにか情報が記されているのか、が気になったが、わたし

ever after

たちはまだそれを確かめていない。

もう 1 つは、三宅の母について。これも前掲稿に記したとおり、三宅が熊本の療養所から大島へ移った理由は、母が来られるようにとのことだったし、三宅は母のことをくりかえし霊交会の機関紙『霊交』紙上でふりかえっていた。その母の大島での面会の道程を霊交会代表と 2 度話した。当時は赤磐から宇野へでたであろうその道のりと時間と手段、さらに宇野から高松へ、高松から大島へと船に乗らなくてはならない。その困難と苦労をふたりで 2 度話した。わたしたちは高松港から赤磐まで車に乗るだけで 2 時間で着いてしまった。わたしには当時のようすを実感できなかった。三宅の母の面会におもいをはせて、それがみずからのなにをかえりみることとなったのか、それをわたしは霊交会代表に聞けなかった。

†

ever after——わたしはこの語を、檜橋朝子の写真集につけられた書名として知った（檜橋朝子『*Ever After*』オシリス、2013 年）。それを知るきっかけは『朝日新聞』の書評欄だった（2013 年 8 月 18 日朝刊掲載、執筆は東京国立近代美術館主任研究員保坂健二郎）。

『ジーニアス英和大辞典』にはその語の用例として、「*They lived happily ever after.*／その後彼らは幸せに暮らしました《◆童話などの終りの決り文句の 1 つ》」があがっている。さしづめ日本語文では、めでたしめでたし、という決まり文句に置き換えられるかもしれない。『新和英大辞典』（研究社、第六版）に「めでたしめでたし」は、「[物語の結び] *and they lived happily ever after.*／その物語はお決まりの「～」で結んである。／*The story ends with the familiar "and they lived happily ever after."*」と記されてあった。

このリフレイン、フレイズ、またはクリシェは、その後のゆくえを問わない仕掛けとなっている。めでたしめでたし、と記して物語を終えてしまえば、そのあとは問わない、問わなくてもよい、ときに、問うてはならないという指示なのである。当事者たちがその後もうずっと幸せに暮らしたことはいうまでもない、ということであり、また、ほんとうにそ

ever after

うなるのかどうか、その後は問えない、問わないでおこう、ということでもある。

フィルム『卒業／*The Graduate*』（Embassy Pictures／UA、1967年／1968年）を監督のマイク・ニコルズは満願成就のハッピーエンドにまとめなかった。最後の場面で、ベン（ダスティン・ホフマン）とエレーン（キャサリン・ロス）は笑みをやめてしまう。ふたりのその後の幸せは、かならずしも保証されていないようにみせる。ふたりの門出を祝福するはずの歌は「*Sound of Silence*」（サイモン&ガーファンクル）と名づけられ、沈黙にもいろいろとあると教えているように聞こえるし、沈黙の音を聞けとの難題を指示しているようでもあるし、土台無理なことであったとの諦念を暗示しているかにも聞こえてしまう。

ベンとエレーンがバスに乗って旅立ってから 30 年後につくられたフィルム『*EVER AFTER*』（20th CENTURY FOX、1998年）に監督のアンディ・テナントは、シンデレラをめぐるその後の人びとを登場させた。それによって、シンデレラという人物を造形し直す仕組みをこしらえたものの、その後もずっとふたりは幸せに暮らしました、めでたしめでたし——という物語の結びそれ自体を問うことはしなかった。物語の原型にほんのひとつち一撃もあたえていないのである。

檜橋はさきの写真集についての『付録』に掲載されたインタビューで、「最後に *Ever After* というタイトルについてですが」と問われ、「ずっと写真をやってきた、ずっとやっていく、というような姿勢を強い宣言ではなく、さりげなく込められたような気もしていて、いいかもしれないとぼんやりと感じています」とこたえていた。写真集に収録された作品に照らせば、この応答では「ぼんやりと」あるいは「ぼんやりと感じています」に留意した方がよいのかもしれないが、わたしは *ever after* は「姿勢」をあらわす鍵ことばなのだと思いつくこととした。物語のお終いにおかれた *ever after* の語は、艱難辛苦、波瀾万丈を経たあとの主人公が享受する未来永劫につづく幸せを保証するお守りなのではなく、ありふれた言葉ながらも、物語をつくる作者の姿勢を俎上に乗せるきっかけとするために打たれたきつい楔なのである。

†

あれからずっと、わたしたちは 2 つの碑について気になってきたし、霊交会の人びともいまだ語り種となる出来事として墓参がある。さきの書評子が「その後ずっと」どうすればよいか、静かに問われている」と評言を結んだとおり、*ever after* の語はこれからも思考をつづけてゆくというサインなのである。

これまで療養所を議論するものたちは、そこを抑圧と差別に充ちた隔離の場所と糾弾することに主眼をおいて、そうした論難のあとをどうするのかあらかじめ見通していなかったようにみえる。こういうとただちに、「私たちの世代が犯した過ちを私たち自身の手で検証し、非人間的な真実を次世代の人たちに伝えていくことは私たちの責務である」（無らい県運動研究会編『ハンセン病絶対隔離政策と日本社会—無らい県運動の研究』六花出版、2014 年）、まだ闘いは終わっていない、との反駁が聴こえてくる。これからもずっと活動の継続が必要というわけだ。

悪の国家との対決から自分たちの過ちの自覚への、あるいは両者を並置するとの転換は、それらを自分たちの使命とするものたちにとっては大きな 1 歩なのだろうが、療養所に生きるものたちは、それとかかわったり無縁なところにいたりしながら、それぞれに生きてゆく。あれからずっと、この島に生きたものたちの生のように、いろいろとあったはずなのだ。

隔離され虐げられてからずっと、彼らは闘いつづけてきました——も、親許から引き離された療養所でそれからずっと、彼女たちは泣きつづけたのでした——も、どちらも療養者の生をうまくあらわしてはいない。もちろんいくつかの例外があるものの、あれからずっと、この島で暮らしました——とは多くの療養者に当てはまる現実である。その暮らしをどのように切り取って描くかが、わたしたち歴史学研究者の仕事であり、そうした企図に手を付けてからずっと、その〈どのように〉という手立てをわたしたちは考えているはずなのだ。あれからずっと。

ever after

【 附 記 】 6月13日(金)から17日(火)まで大島での調査を予定したものの、体調が悪く、15日(日)からに変更。14日(土)に回復したので離滋。15日(日)の聖日礼拝時に霊交会代表から会員のひとりが危篤だと聞く。9:50に逝去。みなさんに悲しいお報せがあります、と始まる園内放送が礼拝のさなかに流れた。5月初めからの1か月半のあいだに、霊交会会員が3名亡くなった。

15日の14:30から前夜式が始まる。緊張していたと話す司会の霊交会代表は、最初にすべき故人の紹介を最後に披露した。医師は死因を特定したが、「いろんなところを患っていた」と話した。礼拝の直後には、からだじゅうの痛みを背負って召された、とのべていた。故人のお名まえからはおもいうかばなかったお顔を前夜式のときの肖像写真で拝見して、聖日礼拝でいくどかおみかけしたようにおもった。そう、このときは遺影があった。

急遽参列することとなったため、失礼ながらわたしはピンク色のTシャツを着ていた。詮方なく、牧師も普段着を詫びていた。在園者の参列は30名くらい。在園者の半数ちかくが協和会館に集っていた。ふだんおみかけしない方々も車椅子で参列。女性が多かったようにみえた。いくにんかの参列者は、ベンチシートに座るとすぐに手をあわせていた。

故人は1934年のお生まれ。1951年に大島へ。10歳台後半での隔離だった。その年に大島で結婚。80年あまりの生涯となる。ご自身も80歳台の霊交会代表は、故人を紹介するなかで、自分自身もそうだというわけではないが「長寿」だったとのべた。

前夜式で1つの発見があった。霊交会教会堂にある、高さ10cmほどの木製の椅子をわたしたちは史料撮影にさいして利用していた。椅子というには低いのだが、床においた史料を撮るにはちょうどよい高さだった。それが椅子ではなく、祭壇まえにおく花瓶の台だとわかった。その低さに合点がいった。

帰りに瀬戸大橋をわたるとき、ずいぶんと汐が干ているとみえた。前日か一昨日が満月。児島のあたりではふだん気のつかない干潟がみえた。大島の浜歩きができず残念におもう。

5月16日(月)に霊交会代表から『藻汐草』リプリント版受領の電話。(2014年5月16日追記)

【執筆分担】

♣=阿部が原案を書き、石居と協議して成文化した。

† =阿部。

† † =石居

【 写 真 】

01 頁=赤磐の三宅姓の墓碑群がある墓所からの光景 (2014年2月22日、阿部撮影)

05 頁=写真番号 [20121023_1] (おそらく三宅官之治顕彰碑建立時に撮影。霊交会所蔵)

16 頁=墓前礼拝時の2つの三宅碑 (2014年5月16日、石居撮影)

19 頁=墓参当日朝の大島栈橋 (2014年5月16日、阿部撮影)

20 頁=墓参当日出勤時の大島栈橋 (同前撮影。画像処理は阿部)

22 頁=昼食をとった食堂まえ (同前撮影)

23 頁上=大島西海岸 (2014年5月17日、阿部撮影)

23 頁下=霊交会教会堂内の三宅官之治肖像写真と花籠 (同前)

32 頁=出航時の大島栈橋を船窓から (同前)

【三宅大兄墓前礼拝祈禱文】

霊交会代表が作成した祈禱文を、同人の了解を得て、つぎの頁に全文掲載した。